

巻頭エッセイ

災害今昔



梅原芳雄

元 中部地方整備局 副局長

平成9年1月2日日本海（島根県沖）でのロシア船ナホトカ号座礁による大量の重油流出事故は、今だに皆さんの記憶に残っていると思います。その時、緊急出動し海洋汚染防止活動を行ったのが旧清龍丸(当時の運輸省第五港湾建設局所有船)です。この活動、功績が評価され、総理大臣賞を受賞しています。(旧清龍丸は、27年前、油流出事故による海洋汚染防止の要請もあり、世界で初めての「浚渫兼油回収船」として建造)もとより、名古屋港・三河港の航路整備に貢献するなど数多くの実績を残し、今回、新「清龍丸」に任務を引き継いだ所です。新清龍丸は、東海地震、東南海・南海地震の発生が懸念されている地域に配備されることもあり、「浚渫機能」「油回収機能」に加え、ヘリコプターデッキや情報収集システムなどの「防災機能」も有しています。

東海地震といえば、過去何度となく起きていますが、遙か昔の痛ましい出来事を思い起こさせる場面に遭遇しました。それは、中部国際空港への海上アクセス基地として整備された港「津なぎさまち」の開港式典(今年2月5日)でのことです。「この開港が、実に500年ぶりの港の復興であり、今後、世代を超えて港の発展に努める」との近藤市長の挨拶がありました。500年前に何があったのか？

500年前というと、室町幕府が倒され戦国時代に入った頃のことです。歴史上、東海地震の記録が初めて出てくる「明応の大地震」での出来事でした。明応7年8月(1498年)に起きた「M8.4クラスの大地震と津波」で、古代より日本三津の一つであった「安濃津」(津の港)が消滅してしまったのです。それまでの「津」は伊勢神宮との

関係で栄え、平安時代には伊勢平氏の軍港ともなり、鎌倉時代以降も商港として繁栄を続けてきたわけですから地域の受けたダメージは想像を絶するものだったと思います。明(中国)の時代の軍備に関する書「武備志」には、「日本三津」が次のように紹介されています。「日本に三津あり、薩摩に属する坊津、筑前に属する博多津、伊勢に属する安濃津がある。三港は、坊津を総路として、商船の往復に…」とあるように、中国から見た三つの重要な港を意味し、大陸との貿易港として機能していたわけです。

「博多津」は、周知の如く、歴史上多く登場するので割愛しますが、「坊津」はどのようなところか？

坊津は、鹿児島県西南のリアス式海岸に位置し、川辺郡坊津町に属します。古くは遣唐使船の発着港で、中国の高僧「鑑真」がようやく6回目にして西暦753年遣唐使船で日本に上陸した港が、この「坊津」です。平安時代には朝廷の公用港として重視され、室町時代に入り中国・琉球・南方諸国との交流が盛んに行われたようで。しかし、江戸時代になると、鎖国令の影響で「坊津」はさびれて、薩摩藩の密貿易の基地として細々と営まれてきたと記されています。

ある出来事を契機に、ほんの少し歴史を調べただけでも、連綿と日本は大陸と交易し、経済・文化などを育んできたようすが垣間見えると思います。海上交通の担ってきた役割、港の果たしてきたことなど、さまざまな物語、ロマンがありますが、「安濃津」が消滅してしまったように、歴史が教える「地震」「津波」の恐ろしさをあらためて強く認識し、事に当たっていくことが……。